

バスケットボール審判員における
ゲームコントロール能力に関する質的研究
～グラウンデッドセオリーアプローチを用いて～

A qualitative research on the game control capability
in basketball referee
～ Grounded Theory Approach is used ～

鈴木 淳

Jun SUZUKI
保健体育講座

大山 泰史

Yasufumi OYAMA
大学院保健体育コース

(平成23年9月30日受理)

Abstract

本研究では, 近年バスケットボール審判員の能力として注目されているゲームコントロールについて注目し, 国際審判として活躍した審判員を対象にゲームコントロールに関する実践知を知識化し, 審判員および指導者育成に役立つ知見を実践現場に提供することを目的とした。

その結果, 「コミュニケーション力」「技術の理解」「戦術の理解」というコアカテゴリーを得ることができた。

「技術の理解」「戦術の理解」によって, 「先を見通した笛」が可能になり, 観客の面白さにつながるゲームコントロールが可能になる。また, 「技術の理解」「戦術の理解」に基づいたバスケットボールによって「正しいバスケットボール」をさせることが可能になり, チームや選手の能力を発揮させ, ゲームコントロールが可能になることが分かった。

また, 「技術の理解」「戦術の理解」には「コミュニケーション力」が大きな影響を及ぼしたことが分かり, 審判員は日常生活の段階から人とどのように接するかが問われ, それがチームや選手とどのように接するかに影響を及ぼし, 審判員としての能力形成に大きな影響を及ぼすことが分かった。

Keywords : バスケットボール, 審判員, ゲームコントロール

I. はじめに

1. バスケットボールにおけるゲームコントロールについて

バスケットボールの審判員は、その場の状況に応じて最善の判定を下すために、様々な能力が求められる。(財)日本バスケットボール協会審判部では、審判員に求められる能力として8つの項目を挙げている(表1)。

表1 バスケットボールの審判員に求められる能力
(財)日本バスケットボール協会審判部, 2011)

- | |
|----------------|
| 1. プレゼンテーション |
| 2. フィットネス |
| 3. メカニクス |
| 4. バイオレーションの判定 |
| 5. ファールの判定 |
| 6. 判定の一貫性 |
| 7. パートナーとの協力 |
| 8. ゲームコントロール |

この中でも、近年非常に重要視されているのがゲームコントロールである。ゲームコントロールは、(1)ゲームの流れや場面を理解し(2)その上でバイオレーションやファールの判定を下すこと、(3)両チームのベンチやプレーヤーを管理することと定義((財)日本バスケットボール協会審判部, 2011)することができる。

ゲームコントロールが重視されるようになった背景の一つとして、ゲームの国際化が挙げられる。この場合、国際化の意味合いとしては二つのことが考えられ、一つは日本国内のゲームにおいても、留学生などが出場する機会が非常に増えたことがある。高校時代に留学しそのまま大学にまで進学してバスケットボールをプレーする人が多い。また、日本バスケットボールリーグ(JBL)や日本プロバスケットボールリーグ(bjリーグ)などのプロバスケットボールリーグには、常に外国人が存在する状況がある。二つ目には、強化の目的で国際ゲームが数多く開催されるようになったことが挙げられる。

このような外国人は、日本人と比べ一般的にバスケットボールの能力が優れている。審判員は、そのような能力の違いを把握しその上で判定を下すことが求められる。また、文化的な背景も日本人とは大きく異なり、物事の考え方や捉え方、表現の仕方、態度などが全く異なる場合がある。そういった中で選手の心理を把握し、審判員が考えているバスケットボールを相手に分かるように表現することが求められるのである。

また、バスケットボールのゲームにおいて観客

を重視するようになったこともゲームコントロールが注目されるようになった理由の一つとして挙げられる。観ているものにとって、面白い、楽しいと思われるためには、ゲームコントロールの定義にも挙げた(1)ゲームの流れや場面を理解し(2)その上でバイオレーションやファールの判定を下すこと、が不可欠である。ゲームの流れや場面を理解しない判定は、観客の興味を削ぐことになってしまう。

2. 日本におけるバスケットボール審判員養成の現状

国際バスケットボール連盟(FIBA)では、国際審判員の受験資格に「36歳未満」という年齢制限を設けている。したがって、日本国内においては30歳前半までに国内最高審判員ランクの2A審判員を取得させ、その後国際審判員を受験するように指導をしている。

しかしながら、2A審判員の若年化は経験不足の審判員を輩出しているという指摘がある。平成17年度の(財)日本バスケットボール協会審判部の資料によると、その当時の2A審判員は69名、平均年齢は44歳、35歳以下の人数は8名となっている。現在とは状況が異なっていることが考えられるが、平成17年度のような状況でありながら、ただ単に2A審判員資格取得年齢を引き下げただけでは経験不足を認めない。

特にゲームコントロールについては、経験が必要な分野と言われている。しかし、審判員養成制度の中に体系化された指導内容は存在しない。また、経験を積んだ審判員の間ではゲームコントロールのような経験的に獲得した内容については、「うまく伝えられない」「若い人に言っても分かってもらえない」ということを頻繁に耳にする。

このように、ゲームコントロールに関する体系的な指導内容がないまま、経験不足の審判員を輩出し、経験のある審判員は自らの経験で得た知識を語る術を持たない、という実態が浮かび上がってくるのである。

3. 個人の実践知を研究する意義と手法

スポーツにおいて様々な技術を指導する場面では、「どのようになっているか」といった客観的な情報を与えるだけでなく、「どのような感じでおこなうとできるのか」といった主観的な情報を伝えることが重要である(會田ら, 2008)。このような個人がもつ主観的な情報は、コツと呼ばれる。

スポーツにおけるコツは、指導実践現場では研究の必要性が指摘されてきたにもかかわらず（阿江, 1999；へべら, 2001）、客観性がないという理由から、ほとんど研究されることはなかった。しかし、近年、調査方法の開発（武藤ら, 2004；波平ら2005）および質的研究方法の適用に伴い、個人の持つコツが実践知として知識化されるようになり、効果的な指導に役立つ主観的な情報として実践現場に提供される（會田, 2007）ようになってきている。

4. ゲームコントロール能力を対象とする意義

バスケットボールの指導者がゲームを観るといふ行為と審判員がゲームを観るといふ行為は類似する点が多い。指導者は、ゲームの状況を認知し、メンバーチェンジやタイムアウト、戦術の変更など様々な対応行動をとる。審判員も同じようにゲームの状況を認知し、判定を下すという対応行動をしていく。そして、それ全体がゲームコントロールにつながっていくと考えられる。したがって、審判員のゲームコントロールを検討することによって、指導者におけるゲーム状況の認知やその対応に関して有用な知見を得られる可能性がある。

また、今回対象とするゲームコントロール能力は、ゲームをどのように認知し、それに対してどのように対応しているのかを検討するものである。ゲームをどのように認知しているかについては、中川らによるボールゲームにおける状況判断過程の概念モデルなどがある。しかし、認知した結果どのように対応しているのかについては研究成果がみられない。実際のゲームでは、ゲーム状況の認知はそれだけで終わるものではなく、それに対してどのように対応するのか、またそれはどのような考え方に基づくのかが重要となる。ゲームコントロール能力を検討することによって、これら認知から対応行動までの全体的な流れを把握できる可能性がある。

5. 研究の目的

本研究では、FIBA公認審判員として活躍した審判員を対象に、ゲームコントロールに関する語りを質的に分析し、これまでの経験で得てきた実践知を知識化し、審判員および指導者育成に役立つ知見を実践現場に提供することを目的とした。

II. 研究の方法

1. 対象者

対象者は、約20年にわたりFIBA国際審判員として活躍してきたA氏とした。表2にA氏の経歴をまとめた。A氏は国際審判員在任中、数多くの国際ゲームを経験している。その中には、アジア以外の地域で開催されているものもある。また、アジア以外のチームが参加している大会もある。異なる文化が触れ合うようなゲームではゲームコントロールは非常に難しく、これらのことを数多く経験していることは、ゲームコントロールに関する有用な知見が得られる可能性を示している。

表2 A氏が担当した主な国際試合

1992年	ジョーンズカップ	台北(台湾)
1993年	ユニバーシアード	バッファロー(アメリカ)
1994年	アジア大会	広島(日本)
1995年	ユニバーシアード	福岡(日本)
1996年	アジア女子ジュニア選手権大会	徳島(日本)
1997年	アジア男子選手権大会	リアード(サウジアラビア)
1998年	アジア大会	バンコク(タイ)
1999年	アジア男子選手権大会	福岡(日本)
2000年	ABA	台北(台湾)
2001年	東アジア大会	大阪(日本)
2002年	FIS国際大会	リスボン(ポルトガル)

また、国内においても全日本総合選手権決勝、日本バスケットボールリーグ決勝、女子バスケットボールリーグ決勝、全日本学生選手権大会の主審を数多く任されており、選手やベンチ、観客を納得させるようなゲームコントロール能力が非常に高いものと思われる。

なお、対象者には、本研究の趣旨を事前に文書にて説明し、調査の協力を得た。インタビュー調査に先立ち、いずれの質問に対しても回答を拒否できることを伝え、調査内容の音声記録に関して了解を得た。

2. インタビュー調査の内容と方法

調査内容は、①ゲームコントロールの内容、②それらの能力を獲得するまでのプロセス、③獲得後の変化の3つであった。

インタビューの方法は半構造化面接を行った。

インタビューの場所は、A氏の勤務先の一室であり、対象者と調査者が1対1で対話できる静かな場所であった。調査は、2010年6月23日に行った。すべての発言はICレコーダーに録音した。

3. データの分析

本研究では、質的研究方法の一つであるグラウンデッドセオリーアプローチを用いてデータの分析を行った。表3には今回の手順を示した。

表3 データ分析の手順

1.データの文章化
2.データの切片化
3.プロパティproperty(特性)と ディメンションdimension(次元)による ラベル付け
4.カテゴリーにまとめる
5.カテゴリー関連図の作成
6.ストーリーラインの作成

データの妥当性および信頼性を保証するためにメンバー・チェック(フクリック, 2002)を行った。調査内容をまとめたものを対象者に示し、それが発言の趣旨と異なっていないか、加筆および訂正箇所はないかを確認した。

また、語りの内容がストーリーラインとして再構成された時に、語りの内容が恣意的に変換されていないかどうかを確認するため、本研究に関わっていない2名の研究者に協力を求めた。この2名は、バスケットボールの技術・戦術研究に従事し、きわめて高い指導力を有する指導者であった。これによってデータ分析の信頼性と妥当性を高めた。

III. 結果

1. ゲームコントロールに関するカテゴリー関連図

ゲームコントロールに関するカテゴリー関連図として図1のような結果を得た。コアとなるカテゴリーは、「コミュニケーション力」「技術の理解」「戦術の理解」の3つであった。

「技術の理解」「戦術の理解」によって、「先を見通した笛」が可能になり、観客の面白さにつながるゲームコントロールが可能になる。「技術の理解」「戦術の理解」の形成は、「コミュニケーション力」に大きく影響を受ける。

「技術の理解」の内容は、「技術レベルの観察」を行い、「レベルに応じた技術」を把握し、それによって「判定基準の決定」を行うというものである。また、「戦術の理解」の内容は、「チームのシステム」を理解し、それと「自分のバスケットボール観との擦り合わせ」を行い、「判定基準の

決定」を行うというものである。

「コミュニケーション力」は、「生まれ育った環境」に大きく影響を受ける。今回の場合、「生まれ育った環境」として、「地方の審判」として存在したこと、高校の「教員生活」があることが分かった。また、「コミュニケーション力」は審判員としての「フィロソフィー」の形成にも大きく影響していることが分かった。

2. ストーリーライン

以下に、ゲームコントロールの実践知に関するストーリーラインを示した。

1) 技術の理解

全日本レベルのバスケットボールを見始めてから今までとは違う技術観というものを感じました。自分はガードだったので、フォワードやセンターの得点を取りに行くプレーを見て、それが世界やアジアで通用する技術なのかどうかの理解が進みました。それはA級審判員になった頃ですが、その頃は公認審判員でも実力がある審判員は国体に呼ばれ、成年男子の国体には全日本を経験した選手が何人か出ていました。それが全日本レベルのバスケットボールとの出会いでした。

両チームのプレーヤーの習得している技術を見て、それぞれのプレーヤーのレベル(能力)を判断します。そして、それによってどの程度のプレーで笛を鳴らすかという笛の基準を明確にします。実際のゲームでは、試合が始まる前のウォーミングアップとゲームが始まって3分から5分の間で個々の選手の能力や持っている技術などを見ます。審判の担当が決まっているときに、事前にそのチームの試合を見る人もいますが、先入観が入ってしまうので事前の試合は見ません。

プレーヤーやチームのレベルによって笛の基準を決められるようになったのは、2Aになって1~2年の頃だと思います。

技術の理解が進むとその現場だけの笛ではなく、先を見通した笛になります。コンタクトに対してファールを吹くということであれば、そのコンタクトだけ見てオフenseが悪い、ディフェンスが悪いという決着をつけるのではなく、プレーヤーの能力によってここまでは許せる、これ以上は許せないという範囲ができ、そこまではプレーを継続させることができます。

途中でプレーを切ってしまう笛では面白いゲームにはなりません。観客を含めたバスケットボールという視点からも面白いゲームになるとは思いません。

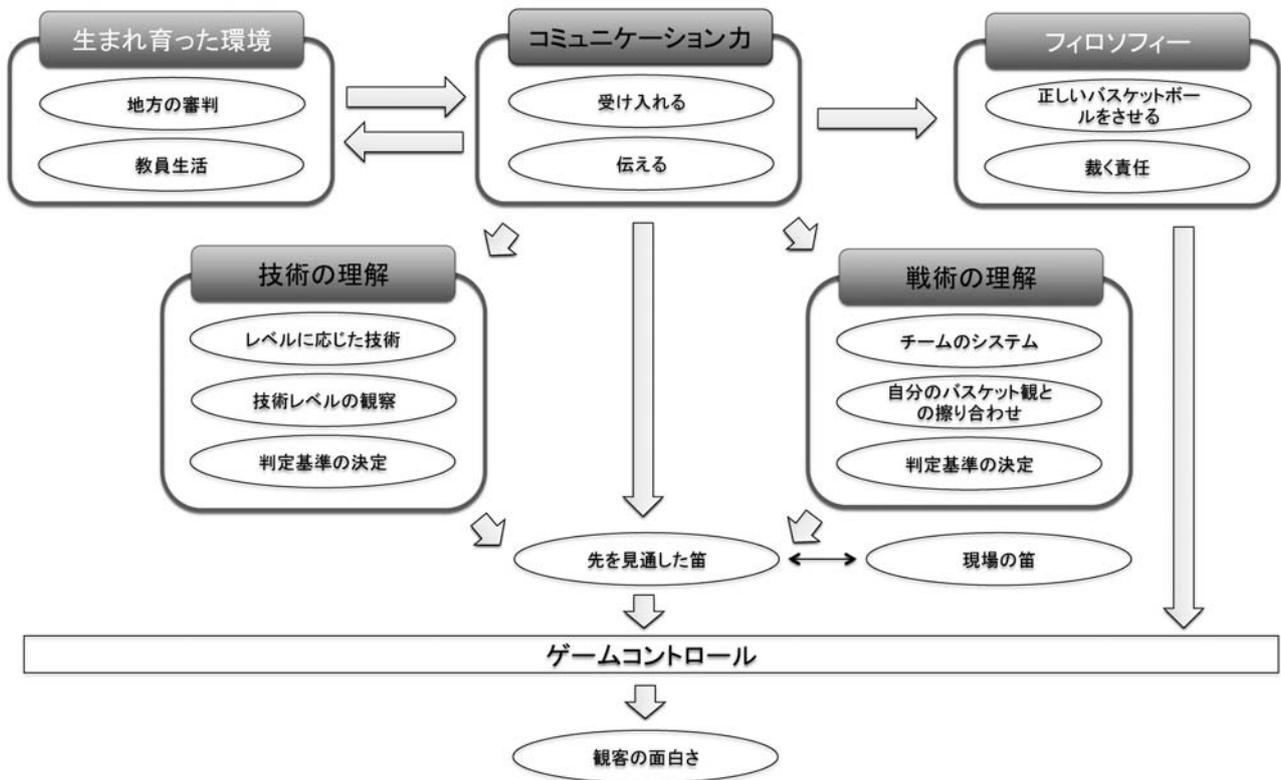


図1 ゲームコントロールに関するカテゴリ関連図

2) 戦術の理解

チームのバスケットに対する考え方、つまりオフェンスシステムやディフェンスシステムを理解します。それを理解した上で、それと自分のバスケットボール観と戦わせます。

チームのバスケットボールに対する考え方の中でも、ボールに対してレシーバーがどのように動いてボールを受けるのかについて感じ取らなければいけません。ボールがあって、残りのプレイヤーがどこからバスケットボールを始めようとしているのかを感じられるレフリーになる必要があります。

3) コミュニケーション力

私は選手やベンチのアピールに耳を傾けるレフリーだと思います。文句を言うなというタイプではありません。だから、選手からいろいろと声をかけてくれます。声をかけやすい雰囲気は自分の中にあっただと思います。審判にプレッシャーをかけてくるようなアピールに対してテクニカルファールをとるようなことはしません。それは、テクニカルファールをとったからといってよいゲームコントロールにはならないという確信があるからです。

選手からのアピールによって自分自身の笛が正

しいのかどうか気づくことができます。プレイヤーやベンチから教えられたことはたくさんあります。アピールをされたときにテクニカルファールをとるようでは、プレイヤーやベンチから学ぶことはできません。どういう気持ちでアピールを言っているのかというプレイヤーの気持ちを理解してあげられないような審判はうまくなりません。

どこかの県の審判長の方に「教員の笛は決め付けの笛」と言われたことがあります。そういう上からものを見るような見方では審判は絶対にうまくならないと思います。自分はそういうタイプの教員ではないと思っていました。教員としても決めつけたり上からものをみるようなタイプではありません。双方の思いを納得するまで話し合うというタイプです。

ファールが起こったときに、取り締まるぞという感じで笛を吹く審判がいますが、私にとっては、ファールをしている人に、あなたですよとファールを知らせるように吹きます。だから、プレイヤーも感情的にならずに、しょうがないなという感じになるのかもしれない。

レフリーは感情的になっているプレイヤーの気持ちを受け入れてあげなくてははいけません。そして、それに対して善い悪いの価値判断をぶつける

だけでなく、どうしたらいいかを伝えなくてはなりません。そんなことを伝えられるレフリーは数少ないと思います。

4) 審判の目とコーチの目

レフリーをやっている時とバスケットボールの指導をしている時では、レフリーをやっている時の方が幅広く見えていると思います。指導をしているとどうしてもボールを持っているプレーヤーが気になります。レフリーの時はボールとボール周辺、それ以外のところも視野に入っています。

また指導の際は勝たなければいけないという焦りやプレッシャー、差し迫ったものがあったり、なんでこんな簡単なこと出来ないんだというコーチングの目で見ると視野が狭くなります。自分が指導している時は、教師の目なんです。レフリーの時は好きなバスケットボールをどうさせるかという感覚で見えています。

ベンチで指導しているときの大半はレフリーの目ですが、追い詰められたり差し迫ったものがあるとそんなのじゃなくなっています。

5) 生まれ育った環境

いろいろと考えてきた結果、レフリーというのは育ってきた環境に影響を受けている部分が多いと思います。私たちと今の若い人達を比べると、同じように小学校ぐらいからずっとバスケットボールを続けてきているのに全然違う。それは育ってきた環境が違うからだと思います。その中で一番大きいのは、育ってきた環境の中でのコミュニケーションのあり方、つまりは人間関係や物事に対する接し方、物事に対する処理の仕方がレフリーに影響を与えていると思います。それが、一生懸命にやっている子供たちをみてどんなふうにもバスケットボールをさせてあげたらこの子たちの満足につながるのかという見方につながりますし、高校生や大学生には厳しい対応をすることもあるということにつながっていきます。

自分は人の意見を切り捨てた経験がほとんどありません。相手の意見は尊重します。その上で自分の考えを示します。そんな風に相手の意見を受け入れながら主張するタイプの教員になったのは、いわゆる進学校と言われる学校ではない学校に赴任した影響が大きいのかもかもしれません。自分の中では教員としての人の接し方とレフリーとしての人の接し方は一致していると思います。

30代の国際審判員になる頃に養護学校に赴任しました。そこでは自分一人では食事ができないような子もいました。そこで自分は「俺がやっているんだから俺のいうこときけ」というような生き

方をしてはいけないことを学びました。また、自分がこの子たちに何が出来るのか、そんなことを考えながら12年過ごしました。そのことが自分の生き方とかレフリーに強い影響を与えたのではないかと思います。だからレフリーがプレーヤーたちに対して何が出来るのか、チームに対して何が出来るのかということを強く思いながら審判をしていた時期もありました。

6) フィロソフィー

正しいバスケットをボールを追求し、正しいバスケットボールをさせる、子どもたちに思い出をつくらせるバスケットボールをするにはどうしたらいいかを常に考えている必要があります。自分の笛で子供達の試合の結果を左右したのではないかと感じ悩むことが必要です。笛を吹くということは人を裁くことにつながり、自分自身の笛が本当に正しかったのかどうかに悩み、笛の責任の重大さに悩まなければなりません。自分の笛を常に吟味しているレフリーを育てたいと思います。

IV. 考察

1. ゲームコントロールの捉え方について

A氏が考えるゲームコントロールされた状態というのは、「正しいバスケットボールをさせている状態」「プレーを継続させ観客にとって面白いバスケットボール」と捉えることができる。

A氏は、審判員は規則に基づいて選手やチームを取り締まるのではなく、バスケットボールをさせる、バスケットボールをやらせてあげることが大切であると述べている。それは、両チームの能力の違いがあろうとも、体格の違いがあろうともバスケットボールをやらせてあげることが審判員の役割であるということの意味する。しかし、これはただ闇雲に、取り締まることなくバスケットボールをさせることを意味していない。ここで必要なことは、コアカテゴリーにもある「技術の理解」「戦術の理解」である。互いのチームのプレーヤーやチームの「技術の理解」「戦術の理解」をし、それに応じた判定基準を設けることによって、互いのチームやプレーヤーがその能力を発揮している状態がゲームコントロールされている状態と考えられる。

「正しい」とあるが、それは規則上間違いや乱暴な振る舞いがないということだけでなく、「技術の理解」「戦術の理解」に基づかないバスケットボールは、お互いのチームやプレーヤーの能力を十分に発揮させることが出来ず、その時点でどちらかのチームやプレーヤーにとって有利な条件、

不利な条件というものが存在してしまっており、バスケットボールを成立させることは難しいことを意味すると考えられる。

このように、ゲームコントロールは一見すると規制するようであるが、規制するという意味合いはなく、「技術の理解」「戦術の理解」に基づいて「正しいバスケットボール」をさせることによって、選手やチームの能力を発揮させた状態を意味していると考えられる。

2. 審判員としてのフィロソフィーの重要性

ストーリーラインにあるように、プレーをみる態度によってプレーの感じ方が異なってくるという見解は非常に興味深い。ここでの態度の違いは、「審判の目」と「指導者の目」という違いである。「審判の目」、つまり「フィロソフィー」は、「正しいバスケットボールをさせる」と「裁く責任」という2つの概念から構成され、「正しいバスケットボールをさせる」は、「技術の理解」「戦術の理解」というコアカテゴリーと非常に関連が深い。

「審判の目」と「指導者の目」という違いは、同じ一人の人間であっても、この対立する考え方や概念によって見たものの感じ方が全く異なってくるということを意味する。経験のあるA氏でもその中で揺れるというものである。

このことから、審判員は自分自身のフィロソフィーを明確にし、常に確認することが非常に重要であると考えられる。

3. 「技術の理解」「戦術の理解」について

「技術の理解」「戦術の理解」は、判定にかかわることと考えられる。バスケットボールの判定は、主にファールとバイオレーションに分かれるが、ファールはコンタクト（身体接触）の有無、バイオレーションは規則違反の有無が問題となる。「技術の理解」「戦術の理解」はコンタクトや規則違反の事実確認のみを指すものではないと考えられる。

従来の審判指導ではどのように事実確認をするかが主であったが、事実確認以外の要素として、起こった事実（コンタクトなど）がプレーに影響を及ぼしたのかどうかを確認することが言われている。プレーへの影響の有無は、起こった事実がプレーに対してどのように影響があるかをみるものであるが、「技術の理解」「戦術の理解」はそれを理解していなければ起こった事実そのものの評価が出来ないということを意味する。それ故、「技術の理解」「戦術の理解」は起こった事実がプ

レーに影響したかどうかを確認する以上に重要であるとも考えられる。

これらのことから、プレーの判定に関しては、「技術の理解」「戦術の理解」が出来るような状態にまで審判員としての能力を養成し、その上でプレーの事実確認の方法、コンタクトなどの起こった事実がプレーに影響したのかどうかを判断する方法などを習得するという一連の流れが考えられる。

4. 「技術の理解」「戦術の理解」が可能になった状況

「技術の理解」「戦術の理解」に大きく影響を及ぼしたカテゴリーは、「コミュニケーション」である。「コミュニケーション」は、「受け入れる」「伝える」というカテゴリーから構成されている。ここで興味深いことは、「技術の理解」「戦術の理解」が可能になった状況として、「受け入れる」ということが非常に大きな役割を果たしているということである。選手やベンチからのアピールを「受け入れる」ことによって教えられたことが大きいとしている。

通常審判員は、判定の一貫性、威厳さを守るために選手やベンチからのアピールは受け付けない。侮辱や妨害行為としてテクニカルファールの対象にさえなりうる。しかし、それをA氏は反発することなく受け入れ、逆に自分自身の審判員としての能力向上に役立てていったと考えられる。

アピールに反発しなかった理由は、それが選手やベンチをコントロールする上で得策でないと分かっていたからとしている。そして、それはA氏自身の「生まれ育った環境」その中でも「教員生活」というものが大きな影響を及ぼしたとしている。

このことから、審判員は日常生活の段階から人とどのように接するかが問われ、審判員としてプレーヤーやベンチとどのように接するのかに影響を及ぼす可能性があると思われる。

V. まとめ

本研究では、近年バスケットボール審判員の能力として注目されているゲームコントロールについて注目し、国際審判として活躍した審判員を対象にゲームコントロールに関する実践知を知識化し、審判員および指導者育成に役立つ知見を実践現場に提供することを目的とした。

その結果、「コミュニケーション力」「技術の理解」「戦術の理解」というコアカテゴリーを得る

ことができた。

「技術の理解」「戦術の理解」によって、「先を見通した笛」が可能になり、観客の面白さにつながるゲームコントロールが可能になる。また、「技術の理解」「戦術の理解」に基づいたバスケットボールによって「正しいバスケットボール」をさせることが可能になり、チームや選手の能力を發揮させ、ゲームコントロールが可能になることが分かった。

また、「技術の理解」「戦術の理解」には「コミュニケーション力」が大きな影響を及ぼしたことが分かり、審判員は日常生活の段階から人とどのように接するかが問われ、それがチームや選手とどのように接するかに影響を及ぼし、審判員としての能力形成に大きな影響を及ぼすことが分かった。

文献

阿江道良 (1999) 動きのコツをさぐる. 体育の科学, 49, 868-869

會田 宏 (2007) 国際レベルで活躍したゴールキーパーの動きのコツに関する事例研究. (財)日本ハンドボール協会ハンドボール研究, 9, 69-74

會田 宏 (2007) ハンドボールのシュート局面における個人戦術の実践知に関する質的研究: 国際レベルで活躍したゴールキーパーとシューターの語りを手がかりに. 体育学研究, 53 (1), 61-74

會田 宏, 坂井和明 (2008) 国際レベルで活躍したハンドボール選手における実践知の獲得過程に関する事例的研究. 武庫川女子大学紀要, 56, 69-76

フリック: 小田博志ほか訳 (2002) 質的研究入門—〈人間の科学〉のための方法論. 春秋社: 東京, p.285

ヘベル, S.A. (2001) 専門家の知—その構造と改善について—. スポーツ運動学研究, 14, 59-68

無藤 隆・山田洋子・南 博文・麻生 武・サトウタツヤ編 (2004) 質的心理学. 新曜社, 3-4

中川 昭 (1984) ボールゲームにおける状況判断能力とスキルの関係. 筑波大学体育科学系紀要, 7, 85-92

中川 昭 (1984) ボールゲームにおける状況判断研究のための基本概念の検討. 体育学研究, 28 (4), 277-297

中川 昭, 松島 誠, 村上 純, 安ヶ平浩 (1990) ボールゲームにおける状況判断とスキルの関係 (II) —プレーヤー観察法を用いての研究検討—. 大阪体育大学紀要第IV部門, 39, 149-156

中山雅雄, 田中雅人, 松本光弘 (1988) サッカープレーヤーの状況判断過程のモデル化. 筑波大学体育科学系紀要, 11, 165-174

波平恵美子・道信良子 (2005) 質的研究Step by Step—すぐれた論文作成をめざして. 医学書院, 1-2

日本バスケットボール協会 (2002) バスケットボール指導教本. 大修館書店, 5-9

(財)日本バスケットボール協会審判部 (2011) BASKETBALL 審判指導・評価ハンドブック.

吉井四郎 (1986) バスケットボール指導全書1. 大修館書店, 5-12